様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：３３９１２
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2014～2015
課題番号：２６８８４０６８

研究課題名（和文）インド・ラダックにおける仏教ナショナリズムの展開に関する研究

研究課題名（英文）A study on the development of Buddhist Nationalism in Ladakh, India

研究代表者
宮坂　清（MIYASAKA, Kiyoshi）

名古屋学院大学・法学部・講師

研究者番号：５０７３４０００

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、インド最北端ラダックにおけるチベット仏教徒による仏教ナショナリズムの展開過程を明らかにすることを目的として行った。方法として、先行研究および資料の検討を行い、フィールドワークを行って資料を補完した。その結果、以下の２点が明らかになった。まず「仏教徒ラダック人」というネーションは、カシミール改宗仏教徒により成立の契機を与えられ、その後ラダックの仏教徒組織に引き継がれ、インド独立、J&K州への併合を経験し、権利回復運動として展開していくなかで強固になった。次に、この運動は仏教徒コミュニティの内部においては仏教伝統を復興させる生活改善運動という面も併せ持っていた。

研究成果の概要（英文）：The research was performed for the purpose of demonstrating the significance of development process of the Buddhist nationalism by Tibetan Buddhist in Ladakh, India. To attain the purpose, previous studies and materials were considered and fieldwork was performed to complement materials. As a result, the following 2 points became clear. Firstly, the nation as "Buddhist Ladakhi" has become firm through the series of campaign by Kashmiri convert to Buddhism and by the Buddhist organization of Ladakh, to recover rights as indigenous inhabitant. Secondly, in the community of Buddhist the campaign had a side as the movement to improve life which makes Buddhist tradition revive.

研究分野：宗教社会学、文化人類学

キーワード：ラダック　仏教ナショナリズム　近代仏教　チベット仏教

１．研究開始当初の背景

本研究は、インド最北端ラダックにおけるチベット仏教徒による仏教ナショナリズムの展開過程を明らかにすることを目的として行った。宗教社会学や文化人類学の従来の研究における、インド（南アジア）の宗教とナショナリズムの関係を対象とした研究は、ほとんどがヒンドゥー教徒ないしムスリムを事例としたものであり、ダライ・ラマ 14 世を指導者とする亡命チベット人を除けば、チベット仏教徒を対象としたものは少ない。特に本研究の対象であるラダックのチベット仏教徒による一連の運動について、日本国内では山田孝子がわずかに触れているのみであり（山田 2009：165-192）、海外に目を転じると、ラダック人研究者や欧州の研究者による研究があるものの、いずれも政治運動としての側面に着目したものであり、仏教や仏教徒がナショナリズムとどのような関係にあったかについて明らかにされたとは必ずしもいえない。

応募者は本研究の開始までにラダックにおいてシャーマニズムを中心とした民俗宗教の調査研究を行ってきた。本研究においてはそれを展開させ、上述の問題意識に基づき、当地の人々がもつ仏教に根ざしたネーションの意識やそれに基づく政治運動に注目した調査を行い、仏教ナショナリズム研究の視点から考察することを目指した。

２．研究の目的

本研究は、ラダックにおける仏教ナショナリズムの展開過程の一端について、文献や資料に基づき実証的に明らかにする。

J&K 州は人口の約 67%をムスリムが占め仏教徒はわずか 1.4%に過ぎないが、同州東部を占めるラダック地域はムスリムとチベット仏教徒がほぼ同数を占める。チベット仏教徒はムスリムにより軽視されその存在を脅かされているとして、1920 年代以降、政治、経済、教育など多方面にわたり権利回復を目指す運動を続け、一定の成果をあげてきた。

本研究は、その過程の一端を検証し、仏教ナショナリズム研究の視点から分析する。焦点となるのは以下の 2 点である。

(1)「仏教徒ラダック人」というネーションはいかに構築されたか

インドが植民地支配を脱して国民国家を形成していくなか、強大なネーション（nation）の狭間で、ラダックの仏教徒により、仏教徒と等置される「ラダック人」というネーションが具体的にどのような過程によって構築されたか。

(2) 運動において仏教団体・仏教者はどのような役割を果たしたか

ゲルク派の高僧クショク・バクラ・リンポチェはインド下院議会議員、在モンゴル大使を歴任した地域の名士であり、ラダック仏教徒協会およびラダック僧院協会の設立やその活動に関わるなど、一連の運動の支柱だったとされる。リンポチェを中心に聖・俗それぞれの仏教団体は、運動にどのような役割を果たしたのか。

以上の 2 点を焦点として、1947 年のインド独立前後の、ラダックにおける仏教ナショナリズムの展開過程を明らかにする。

３．研究の方法

本研究は、まず先行研究およびすでに応募者が収集している資料の検討と分析を行い、そのうえでインド・ラダックにおいてフィールドワークを行って資料を補完し、宗教社会学における仏教ナショナリズム研究の観点から総合的な考察を行う。

1 年目（平成 26 年度）には、主な先行研究を読み込み、またすでに収集した一次資料、二次資料を精査する。2 年目（平成 27 年度）には、ラダックにおいてフィールドワークを行う。レー市に本部があるラダック仏教徒協会、ラダック僧院協会などの機関事務所を訪問し、そこに保管されている資料を閲覧・複製し、またインフォーマントから聞き取りを行う。

それらの文献・資料を、宗教学および宗教社会学における仏教ナショナリズム研究の観点から分析し、インドや広くアジアにおける政教関係の文脈に位置づける。収集した資料や文献はデジタル化し、データベースを構築する。

４．研究成果

平成 26 年度は、先行研究の収集を進め、当該先行研究およびそこに含まれる二次資料の読み込みを進めて論点を整理し、次年度の調査の際に収集する資料を選定する作業を行った。主要なものに、Bertelsen（1997）があるが、これは 1990 年代に書かれた博士論文であり、本文および巻末に J&K 州議会の議事録など、多くの二次資料が添付されている。論文の議論を検討するとともに、本研究にとって有用な資料を抜き出し、精査を行った。

平成 27 年度は、先行研究の収集、先行研究やそこに含まれる二次資料の読み込みを継続した。また、平成 27 年 8 月にデリー市およびラダックのレー市において現地調査を行った。デリー市のデリー大学図書館では雑誌記事などの関連資料を閲覧・複写し、ラダックのレー市では、ラダック仏教徒協会（Ladakh Buddhist Association, LBA）、全ラダック僧院協会（All Ladakh Gonpa Association, LGA）、大菩提会（Maha Bodhi Society）ラダック支部、中央仏教研究所（Central Institute of Buddhist Studies）において、各団体による声明、政府機関への要望書などの閲覧・複写を行った。また関係諸団体では、資料を集めたのみならず、関係

者を紹介してもらい、可能な限り直接に聞き取りを行った。とりわけ、ラダック仏教徒協会の副会長タシ・ムルプ氏、バクラ・リンポチェの補佐を長年務めたラダック地域史家タシ・ラブギャス氏からは、多方面にわたる情報の提供を受け、資料の閲覧や、他機関への紹介をしてもらった。なお、聞き取りから得られた情報は、文字資料の整理と概要把握を終えた後、それらの資料を補完するために用いた。

以上の作業により、これまでおよそ１世紀にわたる仏教徒によるナショナリズム運動の展開過程、とりわけインド独立前後の時期について、概要を把握することができた。

ラダックにおける初期のナショナリズム運動については、1932 年にカシミールの改宗仏教徒が植民地政府のグランシー委員会（Glancy commission）に提出した意見書により知ることができる。意見書はラダックに暮らす仏教徒の「後進性」をグランシー委員会や藩王国政府に理解させ、改善策を講じさせることを目的としていたが、必ずしも直接的な結果をもたらしはしなかった。1947 年、インド・パキスタンの分離独立、第一次印パ戦争を経て、ラダックを含む J&K 藩王国の東部はインドに組み込まれた。政治的な混乱を収めラダック（仏教徒）の利益を確保するため、当初カシミール改宗仏教徒のシリダール・カウルが J&K 州政府のシェイク・アブドゥラ首相と交渉したが、やがて若きバクラ・リンポチェが台頭してその任を継承し、1949 年にインド首相ネルーのラダック訪問を実現させ、1950 年には全ラダック僧院協会を設立した。以後 40 年にわたりリンポチェは同協会の会長として、また J&K 州議会議員、インド下院議員、在モンゴル大使として、ラダック仏教徒の「権利回復」に努めた。1960 年には、青年仏教徒協会（Young Buddhist Association）がラダック仏教徒協会（Ladakh Buddhist Association）と改称し、指定部族（Scheduled Tribe）の地位を求めるなど活動を活発化させる。断続的に続くカシミール紛争の陰で、ラダックの仏教徒はバクラ・リンポチェを指導者に次第に結束し、ムスリムが多数を占める J&K 州政府から政治的に冷遇されているとして、権利回復を目指す運動を継続していく。さらに 1979 年、ラダックは州政府により、南東部のチベット仏教徒多数地区（レー地区）と北西部のムスリム多数地区（カルギル地区）に分割され、これへの失望からラダックのインド直轄領化を求める運動が高揚する。一連の過程を経るなかで、ラダック地域内においてもチベット仏教徒とムスリムの差異が次第に明確化され、コミュナルな排他運動がしばしば起こるようになり、1989 年、チベット仏教徒とムスリムがレー市を中心に衝突し、多数の死傷者をだすに至る。

一連の経過を把握したうえで、「仏教徒ラダック人」というネーションがいかに構築されたか、またその過程のなかで仏教がどのような役割を果たしたかについて、以下のような考察を行った。

(1)「仏教徒ラダック人」というネーションはいかに構築されたか

運動の主体は当初「カシミール改宗仏教徒」であり、元々ラダックとほとんど関わりのなかった彼らが、1920 年代にラダックに仏教徒を「発見」し、彼らを鼓舞することにより、次第にそのネーションがつくられ始めたと考えられる。1947 年にインドがイギリスから独立したこと、続いて J&K 東部がインドへ編入され、ラダックもその一部に併合されたことは、近代国家の枠組みのなかでラダックがどのように位置づけられるかを認識する大きな契機となった。運動の主体は次第にラダックの仏教徒となっていき、バクラ・リンポチェを指導者とする仏教僧院団体（全ラダック僧院協会）および旧ラダック王国の支配階層による団体（ラダック仏教徒協会）が指揮する体制が整っていく。その戦略は、近代国家インドを構成する主流派ヒンドゥー教徒と政治的・宗教思想的な連帯関係を築き、それにより J&K 州の主流派ムスリムを牽制する形になっていった。以上の経緯のなかで、「仏教徒ラダック人」というアイデンティティに基づくネーションが構築されたと考えられる。

(2) 仏教は、運動の精神的側面と具体的な活動の側面において、どのような役割を果たしたか

一連の運動は、対外的にはネーションの構築を通じた権利獲得のための政治運動であるが、コミュニティ内部においては仏教の伝統を復興させる運動という面も併せ持っていた。カシミール改宗仏教徒は、仏教徒としての「良き伝統」に合致しない、飲酒、一妻多夫などの「悪習」を糾弾し、また教育の遅れを問題視し「チベット語」による教育を主張するなど、生活改善運動に取り組んだ。その後、運動の主体がラダック人になっていくなかで、こうした運動は草の根的に浸透していき、また法的な環境も整備されていく。これら一連の運動実践はダルマパーラが率いていた大菩提会をはじめとする近代仏教徒運動の影響を受けたものであり、コミュニティ内部における生活改善運動が対外的な権利獲得運動と連動し、「仏教徒ラダック人」というネーションを強固にしたと考えられる。

以上のように、ラダックの仏教徒によるナショナリズム運動は、外部からのまなざしと働きかけを内面化していく形で進行してきた。1995 年にラダックのレー地区は大幅な自治権を獲得したものの、依然としてインド政府の直轄領化を求める運動が行われている。より大きなネーションであるヒンドゥー教

徒を同じ「インドの宗教」の信者とみなし、ムスリムを共通の敵とみなして結束しようとする現代ラダックの仏教ナショナリズムは、しかし、一定の成果をあげつつも怯えを払拭できないジレンマに陥っている。

今後も調査研究を継続し、この問題について考えていく予定である。

＜引用文献＞

山田孝子、2009『ラダック―西チベットにおける病いと治療の民族誌』京都大学学術出版会。

Bertelsen, Kristoffer Brix 1997. “Our Communalised Future. Sustainable Development, social Identification and Politics of Representation in Ladakh. PhD thesis, Aarhus University.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

① 宮坂　清、インド、ラダックにおける仏教ナショナリズムの始まり―カシミール近代仏教徒運動との出会い、名古屋学院大学論集社会科学篇、査読なし、第 51 巻第 2 号、2014、pp.249-260
https://www.ngu-kenkyu-db.jp/V08130.php
DOI:10.15012/00000115

６．研究組織

(1)研究代表者

宮坂　清（MIYASAKA, Kiyoshi）
名古屋学院大学・法学部・講師
研究者番号：５０７３４０００